

CSO アワード 2019「大阪市長賞」受賞記念  
一般社団法人 codomoto ままちっち × 阿倍野区長



大阪市内の地域課題・社会課題を解決するために、ビジネス手法を用いて大阪市内で活動するCSO（市民社会組織）による優れた事業を表彰する「CSOアワード大阪市長賞」。

「一般社団法人codomotoままちっち」さんは、子育て中のママたちが地域密着の子育て情報などを当事者目線で15年にわたって情報発信されています。そのcodomotoままちっち（以下、ままちっち）さんが行っている「地域とつながる子育て支援・子育て期スキルアッププロジェクト」が2019年度大阪市長賞を受賞したことを記念して、代表の林 静香（はやし しずか）さん、スタッフの越川 結梨（こしかわ ゆり）さんと活動の拠点を置く阿倍野区の区長との対談が実現しました。

阿倍野区を拠点に長年地域に根差して子育て世代を支える活動をされてきたままちっちさんと、積極的な子育て支援に取り組む阿倍野区長に、阿倍野区で活動することや子育て支援についてから子育て中のママのキャリアアップのお話まで、日ごろの活動を通して感じている想いについて、たっぷりお話いただきました。

まずはままちっちさんから自己紹介も兼ねて活動を始められたきっかけや想いなど教えてください。

【codomoto ままちっち：林氏】

改めまして、ままちっちの林です。「子育て情報ままちっち」はこの10月15日に15周年になりました。創刊した15年前といえば、もちろんスマホはなく、インターネット上にも地域の子育て情報はあまりない、そんな時代でした。自分自身が結婚後阿倍野区へ転居してきたこともあり、小児科の情報だったり幼稚園や保育所、学校の校区がどこかも知らないような状態で子育てをスタートしたと



左：codomoto ままちっち代表 林静香さん  
中：山田国広 阿倍野区長  
右：codomoto ままちっち 越川結梨さん

ころがあります。区役所の交流会や園庭開放などにも参加したのですが、今ほど親子でお出かけできる場所もなく、交流の機会が少ない状況だったというのが「子育て情報や先輩ママに『聞きたい』、先輩ママの『伝えたい』が知れる情報紙があればいいな」という想いを持つ大きなきっかけの一つでした。

ちょうどその頃、阿倍野区内で子育て支援をされていた団体の方とお話しする機会に恵まれ、自分の想いを話したところ「応援するから作りましょう」と地域の子育て支援団体の皆さんや、社協(社会福祉協議会)さんとのつながりを作っていたり、区役所の方にサポートしていただいたり。そこから[子育て支援連絡会](#)(情報交換を目的として市民、行政、専門家が一つのテーブルで情報を分かち合い、参加可能な事業に協働して取り組む会)にも参加させていただき、ずっと活動を続けてきました。当初は20人くらいのママが集まりました。もちろん卒業される方もいましたが、新たに「手伝うよ」と参加してくれる方がいて、ママたちの力でずっと続いています。

それから、「子育てしかない」という状況がしんどかったのもきっかけの一つです。それまではずっと仕事をしていたのに、24時間「〇〇ちゃんのパパ」だけになり突然自分がなくなったかのような感覚がありました。スタッフにも「大人としゃべりたかった」「大人同士の会話がしたくて来た」という人もいました。

今回15周年に合わせてInstagramにて、読者の方からメッセージを寄せていただいたのですが、「転居してきて何も知らない不安な状況の中で、ままちっちを読んで救われた」、「初めての子育ての時に助けられた、次の発行を心待ちにしている」といった声をたくさんいただきました。普段読者の声を聴く機会がないので、私たちも紙面を作っていて「ホンマに役に立ってるのかな」「今の現役ママが必要なものを作れているのかな」ということが常に気になっているのですが、今回たくさんメッセージをいただいて、ママ達からの口コミをベースに当事者のママ達が発信していることを特徴として「やってて意味があったんやな」と励みになっています。

#### 【山田阿倍野区長】

まずは、区役所子育て相談室との協働で、子育てのサポート活動・情報発信を中心にご尽力いただいておりますことをお礼申し上げます。

私は過去にコミュニティビジネス(ビジネス手法を用いて市民が主体的に地域課題の解決を図る事業や活動)の支援を担当したことがありまして、一般のビジネスと違って地域課題を解決するという



社会的意義が大きく、活動の継続に非常に苦労されていた方が多かったように記憶しています。ままちっちさんは情報を求めている当事者であるママ達がスタッフとして情報紙を作る、といった直接のニーズを一番理解していることもあるかと思っていますが、継続の秘訣がありましたら教えてください。また、今は活動開始して15年続けてこられて安定されていると思いますが、活動当初は色々と苦労もあったかと思います。存続の危機、なんてこともあったとすれば、どのようにして乗り越えてこられたのか、聞かせていただきたいと思っています。

## 存続の秘訣は「人」

【codomoto ままっち：林さん】

存続の秘訣は「人」が大きいと思います。今のスタッフも歴代のスタッフも自分が読者やファンで、ままっちに助けられた、子育てがより良くなったといった経験があり、子どもがちょっと大きくなって何かできることを手伝いたい、というモチベーションの人が多いです。子どもを寝かせた後、夜中に原稿を書いたり、冊子を置いてくれるお店や施設 150 か所ほど配るのですが、子連れで手分けして持って行ったり。それをしてくれる人がずっといたというのが秘訣かな、と。

【codomoto ままっち：越川さん】

私も子どもが0歳児のときからままっちのファンでした。子どもが1歳になったときにたまたまホームページでスタッフ募集を見つけて応募しました。それまではずっと子どもと一対一でいることが多く、「ママ以外の自分」、「自分ができる何か」がほしいと思っていました。

【codomoto ままっち：林さん】

スタッフはみんな子どもがいて、子どもが突然熱を出す、家を出ようとする、「トイレ」っていうことも経験していますから遅刻することがあることもわかっています。だからそういったハードルの低さはあると思います。ボランティアなので、「できる人が、できる範囲で、できることをやる」ということなのですが、すごく責任感があって、会議などにも参加してくれる姿を見ると自分が経験して助かった思いであるとか、次のママに！って思いが伝わってきてうれしいです。

あとは、社協さんの助成金をいただいたり、地域の病院やお店の方たちが広告協賛で参加してくださることで印刷代などの経費をまかなうことができていますし、冊子の配付も子育て支援連絡会のご協力をいただくなど協力関係が築けていることも継続の秘訣だと思います。

【山田阿倍野区長】

読者・ファンができるのは、企画やデザインの力が強みとしてベースにあるからだと思います。そこに関心を持った方を子どもと一緒にできる現実的な形で募集することでスタッフが続けていったのでしょうね。また、広告協賛をしてくれる地域の病院やお店があるというのも、この子育て情報紙に価値があるからこそ協力していただけるのかなと思います。今では、元の職場に戻る際のスキルアップにもつなげようと「小さな雇用」ということまでされていますよね。

## ママの「やってみたい」がスキルアップに

【codomoto ままっち：林さん】

自然と、という部分もありますが、全然違う職種の育児休業中の方の「やってみたい」がスキルアップにつながることや、ままっちの活動に参加していたことが再就職の際にプラスに評価された、といったこともありました。記事を書くのもそうですけど、企画書や依頼書を書いて持って行く、子どもと一緒に

でもそんな経験ができる活動ではありますね。

また紙面づくりでは、どの人でも参加できるということがあります。企画や記事の対象は「子育て」ですので、例えば子どものアレルギーに関することや子どもの発達に関すること、また子どもの遊び場に関する事など、興味関心がどんなことでも参加できるというのは大きいかと思います。

【山田阿倍野区長】

スタッフそれぞれの関心や専門性がわかりますね。

【codomoto ままっち：林さん】

スタッフ全員がママですし、リアルというか等身大というか、本当にママの声、当事者が作っているということかな、と思います。

大変だったことといえば、途中、スタッフが全然いないという時期がありました。でもそれは今も潤沢にいるわけでもないですが。

【山田阿倍野区長】

やはりそういうタイミングがありましたか。

【codomoto ままっち：林さん】

そうですね。創刊した15年前は専業主婦の数も多く、子どもも3歳から幼稚園に行くので、それまでの間、何かしようか、手伝おうかと。今は育休中の方も増え、幼稚園であっても4年保育というかプレスクールからというのが主流になってきて、ママが非常に忙しい。予防接種も増え、子連れで参加できるイベントが増え、0歳児のママでもみんな予定がいっぱいです。メインで活動していたスタッフも子どもが成長して、いつまでもボランティアをしてもらえない、働かなくてはいけなくなってくる状況がありました。

【山田阿倍野区長】

元の生活に戻らなきゃならない、と。スキルアップしてってことで、それはそれで支援しているわけでもありますよね。

【codomoto ままっち：林さん】

ボランティアで継続することの難しさもあり、また少しずつ仕事の依頼などを受けることも増えてきたこともあり2016年に法人化しました。だからと言って急に「仕事だ」「収益を」とはならなくて、やりがいであったり楽しさといったところでバランスをとっています。企業さんとの協働や市の受託事業など少しずつ受けていますが、ちゃんと賃金がつかないと続けられないな、っていうのが今の課題ですね。

【山田阿倍野区長】

コミュニティビジネスの課題ですね。ただ、あまり一度にたくさん受けることもできませんし。

今年は特に新型コロナウイルスの感染拡大の影響が大きいですよね。ままちっちゃんが親子で遊べて交流できる場として運営されている「ふらっとひろばままちっ」も一時は休館されて、今は再開されていますが今までと同じようにはいかないこともあるでしょう。イベントなども制約がある中で工夫されているところ、やり方を変えたところなど教えてください。

## できないことは、「できる形」に変えて

【codomoto ままちっ：林さん】

再開後、消毒やマスクの着用などの感染症対策はしています。また施設利用も時間単位で入れ替え制にし、人数制限をしています。気候がよくなったこともあってか9月頃から人が戻ってきた感じはしていて、このコロナ禍の間に出産された方が外に出てきてくれるようになってよかった、との思いがあります。

あとは、ままちっのメインイベントとも言える「おさがりサイクル」。子ども服や靴、マタニティ服のおさがり会で毎回参加者が100人を超える、バーゲン会場のような過密イベントですが、今まで年2、3回開催していたものがずっと開催できず、問合せをいっぱいもらっていました。先日、やっと規模を小さくして開催できたのですが、初めて来館された方にままちっの活動を知っていただくきっかけになりました。「おさがりサイクル」はニーズがとても高いのでうまく対策しながら続けていく予定です。

それから、あべのキューズモールさんと連携して毎週実施していた「あべのキューズモール MamaSmile プロジェクト」。親子で参加できるイベントなのですが、今も会場のキッズスペースが閉鎖されているため3月後半から毎週インスタライブで続けています。「インスタ見て」と初めてひろばに来られる方も増え、SNS含めスタッフがコンスタントに発信し続けたおかげかな、と思っています。

【山田阿倍野区長】

コロナ禍においてオンラインを活用した取組も見られますが、これはライブでやっているんですか。



「あべのキューズモール MamaSmile プロジェクト」  
インスタライブ

【codomoto ままっち ; 林さん】

生配信でやっています。今までスタッフの誰も経験したことなかったので試行錯誤しながらはじめましたが、スキルアップになっていますね。それもあべのキューズモールさんがママたちのためにとの想いを一緒に持っていて、インスタライブでもぜひ続けてください、と言ってくれて。子どもがいると生配信のタイミングで見るのが難しいときもありますから、アーカイブや YouTube からも見てもらえるようにしました。

【山田阿倍野区長】

進んでいますね！

インスタライブや「おさがりサイクル」で初めて来られる人が増えると、スタッフ候補が増えるのでは？

【codomoto ままっち : 林さん】

昨年から期間限定のモニターを募集すると「何かできることがあれば」と参加してくださるママが増えました。期間が決まっていることもあって育休中の方も多いです。コロナ禍のなか zoom による会議でのスタートでしたけど。

【山田阿倍野区長】

すごいですね。これまでとは違う新たな方法を早い段階から取り入れられて。

「おさがりサイクル」以外のイベントはどうされていますか？

【codomoto ままっち : 林さん】

本当は 3 月に大きなイベントを企画していたのですが、キャンセル・年度内中止となってしまいました。でも、少し形を変えて、阿倍野区、三田市、尼崎市の地域の違うママ支援団体さんが一緒になって「てんてんマルシェ」というイベントをします。開催エリアも開催日もバラバラ、一か所に集まるのではなく、オンライン上で一つのマルシェとして告知し合って一つのイベントとしてやりましょう、という試みです。阿倍野区は文の里商店街さんが協力してくださり「おさがりサイクル」も転々とする予定です。今までは一つの会場に服のサイズ分けをして置いていましたが、こっちの店の軒先ではサイズ 50cm の服、あっちの店の前はサイズ 80cm と転々としてもらおうと。商店街なので半分外という安心感もあります。(事務局注釈：てんてんマルシェは 11 月 21 日、22 日に開催されました。)

【山田阿倍野区長】

感染症対策をしながら、地域の商店街ともつながりを持って、使えるところを使っておられますね。阿倍野区の子育て支援連絡会には以前から参加いただいておりますし、広くつながっておられるので、そのほかにも活動の事例として、特徴的な他団体との連携などありましたら。

【codomoto ままっち : 林さん】

「あべのキューズモール MamaSmile プロジェクト」に絵本の読み聞かせボランティア団体の方に来

ていただいたり、イベントや講座の講師として子育て支援連絡会の方に来ていただいたり。

普段の活動とは違う場で発表できることを喜んでくださっている部分もあります。ままちっちのスタッフ研修に来ていただいたこともあって、自分たちもスキルアップしています。



——つどいの広場（大阪市委託事業）メンバーでの会議で、立場がよく似た団体と交流が深くなり、お互い刺激し合ういい関係が築けたとお聞きしました。

【codomoto ままちっち：林さん】

同じ立場で同じ悩みを相談したりアドバイスをいただいたり。どちらかというと教えていただくことが多いですけど（笑）

【山田阿倍野区長】

身近な地域でする事業であるとは思いますが、何か夢、例えばビジネスモデルとして全国に広げていきたいとか、これだけの発信力をお持ちなのでこれから先めざすところはあるですか。

【codomoto ままちっち：林さん】

特殊なスキルを持ったプロフェッショナル集団というわけではないので、どこの地域でもできると思っています。過去に広告協賛のことも考え、発行部数を 3,000 部から 6,000 部まで増やすときに阿倍野だけでなく東住吉区にもエリアを拡げました。その後エリア拡大の話もしていなかったのですが、また可能性としてエリア拡大も考えています。というのもこの 15 年の間に他区で活動されているいろんなママたちの知り合いが増えました。そういう方たちと連携しながら活動する方法が考えられたらいいな、という想いがあります。もちろん、発信ツールとして紙媒体がいつまで続けられるのか、といった不安もあります。実際、紙媒体って大変なので。でも紙の良さもあり、Web だけにはならないんだな、とも感じています。

【山田阿倍野区長】

遠い将来はわかりませんが、少なくとも区役所の広報紙も毎月 1 回、今年度から全戸配布にしましたからね。もちろん web の強化もしていますが、一方で紙媒体は別の層に働きかけていけるので必要だと。

【codomoto ままちっち：林さん】

紙媒体のほうが信用できるという気持ちを持ってくださっているのかな、とっていて。たまに私たち

がびっくりするくらい「ままちっちに載ってたから！」と言われて(一つの意見やからそんな信用せんといて～)って思う時があるんですけどね(笑)。

## 自分と同じ「ママ」が作っているという信頼

【山田阿倍野区長】

「ままちっち」というブランドですね。

【codomoto ままちっち：林さん】

同じママが作っているという安心感、信頼感なのかなと思っています。冊子は経費も手間もかかる上、記事も間違えられないから大変です。Webだと「間違えてた！修正しといて！」をやると思えばできちゃう面もあるんですよ。

【山田阿倍野区長】

その分原稿を練っているから、紙媒体の信頼性があるのかもしれないですね。

せっかくできたママ同士のつながりでエリアを拡げつつ、現実的な採算を考えて。私は林さんが社長として指示を出して大阪という枠を超えて発行エリアを増やしていくことができると思いますけどね。「次の林さん」をどんどん輩出していく、とかね。

——越川さん筆頭にスタッフにも林さんに付いてきている人がいっぱいおられますね。

【codomoto ままちっち：林さん】

この阿倍野区で活動ができたのは、子育て支援連絡会や支援のネットワークがあったからだと思います。行政の方の協力も大きくて、区のホームページにリンクを貼ってくださっているのもありがたいです。

——これは、阿倍野区が先駆的で、子育て支援連絡会の中心で活動されていた方と林さんが出会われた、そこからスタートした。

【codomoto ままちっち：林さん】

その方の後押しがあって、区役所の担当の方にもつないでいただいて。また区役所の担当の方も応援する想いをすごく持っていてくれて、協力してくださっていました。その後もずっと協力をいただいています。

【山田阿倍野区長】

区役所も一緒に活動していた時期がありましたね。



——そこからのスタートだったこともあって阿倍野区は連携が取れていた。

【codomoto ままっち：林さん】

ゼロからのスタートで、最初から助成金や広告協賛による自活の道を探りながらだと厳しかったと思うんです。だけど区役所や子育て支援連絡会との連携で最初の一步をサポートしてもらえたというのは大きかったと思います。

【山田阿倍野区長】

人との出会い、ですね。いい話をさせていただきました。

【codomoto ままっち：林さん】

それこそ区内 10 か所のつどいの広場でも情報紙を配ってくださるわけですから。

——そこまで子育て支援がつながっているところは珍しく、広がりきらない、こども子育てプラザなどの公的機関や保育所などで連絡会が形成されているところが多い、とは聞きますね。

【codomoto ままっち：林さん】

任意団体であっても区役所や行政の方と一緒に参加できる子育て支援連絡会は、すごく意味のある形だと思います。

【山田阿倍野区長】

そこが難しいところで、阿倍野区は以前から広く開かれていたんですね、繋がりがあってやっていると。

今では子育て支援連絡会をある意味リードして、メンバー同士引き合わせていただいている。これからも安心して子育てができる環境づくりをめざしてご活躍いただきたいと思います。

——対談としては、ここで一度締めさせていただきます。ここからは阿倍野区役所子育て支援担当職員、市民局担当職員も交えて、いい感じに力が抜けて展開されたフリートークをお楽しみください。

【市民局担当職員】

せっかくの機会なので、ままっちさんから区長に聞いてみたいことがあれば。



【codomoto ままっち：林さん】

阿倍野区は高齢者世帯が多いとも言われているのですが。

【山田阿倍野区長】

そうですね。阿倍野区はいいところなのでずっと住み続けておられる方が多いため高齢化するということもあるでしょうが、一方で新たに住み始められる方も多い。誰もが住みたい街、住み続けたい街阿倍野、って実際そういうことだと思います。高齢者支援もしていますが子育て支援も同じく大事なことで、これは引き続きサポートさせていただきながらできることをやらせていただこうと思っています。

【codomoto ままっち：林さん】

あとは、行政と協働させてもらえるところがあれば、協働させていただきたいです。

【山田阿倍野区長】

それはこちらと同じ気持ちで、お願いさせていただきたいと思っています。

【阿倍野区役所子育て支援担当職員】

ままっちさんの魅力は、情報、情報誌はもちろんですが、何より子育てに対する想いが伝えられていくことだろうと思っています。つどいの広場の運営をしていただいているから余計にでしようがスタッフさんからつどいの広場に来られた方に想いが口づてで伝えられていく。またそのスタッフさんにも魅力を感じる。実際に私たちも相談を受ける中で、「ままっちを見て」とか「つどいの広場に行って、すごく助けられた」ということをたくさん聞きます。来られるママたちがそういったことを求めているということはあるのかなと思います。

## ビジネスじゃない。「ママたち」です。

【codomoto ままっち：林さん】

今は子育てに関する考え方や価値観、環境も多様化していて、スタッフ自身もさまざまな想いを抱えながら対応しています。たとえば「すべてをママ・パパが手作りでがんばらないといけない」というのもしんどいですが、かといって「なんでもプロにしてもらおうほうがいい」と子育ても料理も外注してしまうことがよしとされるような流れへの抵抗感もあったり…。その伝え方に悩みは常にあります。「(いろんな情報に)焦らなくていいよ」「その考え方もあるし、こんな考えもあるよ」と伝えたい想いをみんな持っています。

【阿倍野区役所子育て支援担当職員】

子育て支援の会議の場でも、そういった話題になることが多くて、皆さんそういう少し昭和な感覚というか持っておられる。小出しにしなきゃならないだろうけども、これを伝えたいって話ができることが

私は嬉しいし、同じ考えだし。「みんなで見守っているんだ」って思いが持てるのはこういうことなんだろうな、と思います。

【codomoto ままちっち：林さん】

もとはといえば、スポンサーの意向で子育ては「こうしたほうがいい」みたいな商業ベースの子育て情報がたくさんある現状があって、本当にママに必要な情報を届けたいという思いがありました。だからずっと広告も何でもかんでも載せたくない、という普通の企業なら「アホか！」っていうことをずっとやってきた。だから人件費が出せるだけの売上げが出ないというジレンマ、ビジネスとしては難しいってことがあります。



【山田阿倍野区長】

クラウドファンディングとか、これも借りができてしまうのかな？あとは寄附してくれる人を募るとか。卒業生もいっぱいいますし。

【市民局担当職員】

今の活動方針というか考えに賛同してくれる方はいそうですね。共感が得られる部分がすごくあるのではないかと思います。そこに今の活動の魅力があって、スタッフさんも繋がっていく。

【山田阿倍野区長】

ブレずに、一貫した考えですし。

## 「ママ+父(ちち)」で「ままちっち」！

【市民局担当職員】

ずっと気になっていたのですが。

この15年、時代や社会が変わってきている中で、昔は専業主婦が多かったけれど、今は共働きなどママが早くから働くようになってパパの存在もないとしんどくなっていると感じています。その中でイクメンなどの言葉も生まれてきていますが、紙面上パパの姿があまり見えないのは意図しているのでしょうか、あるいはもっとパパも巻き込みたいという思いがあるのでしょうか。

【codomoto ままちっち：林さん】

実は、「ままちっち」の「ちっち」は「父(ちち)」なんですよ。

【一同】

へえ！知りませんでした。

【codomoto ままちっち：林さん】

過去には育休パパの連載もあったんですが、パパがあまり出てこないのはママが会議をして企画構成しているからで、どうしても後回しになってしまっていて…。ですので15周年号からは、意図的に「突撃 パパにインタビュー」をコーナー化して毎回パパに出てもらうことになりました。

【阿倍野区役所子育て支援担当職員】

パパの取り組みをしたのは早かったですよね、イベントだったり連載だったり。パパをスタッフに、っていうのは難しいですか？

【codomoto ままちっち：林さん】

今はおられません、全然あります。パパのスタッフが欲しいよね、って声は出てきています。

【山田阿倍野区長】

「パパさん募集中！」これからの一つの方向ですね。

【codomoto ままちっち：林さん】

「何かパパのイベントをしよう」と企画を考えてみても「うちのパパは絶対参加しないな」というスタッフが多くて、「イベントとか好きやで～」ってパパが何人かいたらイベントもできてたでしょうけど結局実現しないままで。だから同じ子育て支援団体のこももさん(NPO法人こももネット)のパパDAYはすごいと思います。

【阿倍野区役所子育て支援担当職員】

こももネットさんは土曜日はお父さんと子どもさんで来てください、というパパDAYを作っていて、結構来られるそうです。

【codomoto ままちっち：林さん】

今は全然来られると思います。だからほんとはパパの企画も出来たらいいなと思っているのですけどね。

【市民局担当職員】

正直、パパとしてはママがいっぱいいるところに行くのは心理的にハードルが高くて。パパの日と言われると行きやすい、あまり身構えずに行けるっていうのはあります。

【codomoto ままっち：林さん】

本当は体を使っての遊びや、パパが来てくれたらいいなって思う企画はあります。木を切るとか...

【市民局担当職員】

意外とそういうことをパパがやっていると、子どもたちは普段あまりそんな姿を見ないからか嬉しそうによってきますよね。そうになるとやってるパパのほうも楽しかったりする。

【codomoto ままっち：林さん】

これからの課題ですね。

【山田阿倍野区長】

「ままっち」の名前の由来は知らなかったです。絶妙にぼかしている感じがちょうどいい名前だと思いますよ。

【codomoto ままっち：林さん】

よく「ままっち」って言われるんですが、ぜひ由来から覚えてください！

